

作業地全域で記録的な水稻栽培

2019年7月3日 カンレイ村をG岩盤直下に臨む



東部全域で記録的な水稻栽培

今年は、ベスード郡、シェイワ郡、カマ郡、至る所で水稻栽培が盛大で、人々を驚かせている。印象では全耕地の約 40～50%を占める。このように広範な水田の出現は異例で、おそらく史上初だ。背景にはパキスタンからの輸入米価格の高騰があると見ている。この一年、パキスタンは通貨危機を招いてルピーが著しく下落、コメ市場に混乱があると見ている。パキスタンもこの数年ひどい水欠乏だが、コメ生産が激減したという報告はない。

もともと水稻栽培は我々の奨励するところで、狭い耕地で多くの人口を養う集約的農業には、連作できて栄養価も高い米作が適している。また、土壌改良の上でも、水田造成は効果があると見ている。しかし、米作は畑作の 5 倍の水を要する。カマ堰、カシコート堰、カチャラ堰、ミラーン堰の各流域では十分な水量が保障されるが、マルワリード堰流域が不安を抱えている。

末端までの送水が危ぶまれる上、地域によっては土地が過湿ぎみとなり、トウモロコシらの生産が落ちる。また、全体の水欠乏を考えると、水の有効利用の点で、必ずしも最適とは言えないこともある。

マルワリード用水路の実際の送水量は、毎秒 4 トンを超えたことがなく、大きな試練に直面している。理想的には農業専門家を入れて、輪作制度を復活させることだが、旧自治会が拘束力を失い、行政も指導力を発揮できない空白状態が続いている。長い間には失敗と成功の経験を踏まえ、村落間で何らかのルールや合意ができると見ているが、現在はその過渡期だ。また、言葉でそれを伝えるのは難しい。PMS としては、排水網の整備された現在、先ずは見合うだけの送水量を確保すべく、改修計画を進める。

酷暑と乾燥再び

マルワリード用水路、改修へ向けて準備着々

事務局のみなさん、後藤・村上先生、
みなさん、お元気ですか。

日本も気候変化で大変ですが、世界中おかしくなっています。
アフガニスタンは昨年、全土で干ばつに脅え、冬の降雨で一時持ち直しましたが、再び酷い暑さと少雨です。

お伝えしたように、昨年秋、集中豪雨被害でマルワリード用水路が寸断され、抜本的な改修計画が立てられていました。決して喜ばしいことではありませんが、今や私たちの作業地一帯が東部で例外的に旱魃を免れており、避難民が逃げ込める数少ない地域の一つとなっています。PMS はあらためて維持補修の重要性を認識、地域を巻き込んで計画的に事を運んでいます。しかし、日本の公共事業のセンスで考えると、誤ったイメージを描くことになるので、多少説明します。

住民のまとまりが最も悪いのがマルワリード堰流域です。新開地が多く、様々な集団が雑居状態だからで、地縁が形成される途上にあると考えられます。

マルワリード堰流域を安定させること自体が他地域の範となり、作るだけでなく維持補修も重要で、普及計画にも影響すると考えています。行政だけでなく村落指導者たちとも会談を重ね、取水口からブディアライ村まで約 10 kmを当面の標的とし、改修を通して徐々に用水路そのものの機能も改善していこうとしています。この区間が集中豪雨被害の激しかったところで、特に米作を念頭にした送水量の改善を意図しています。

これまでの調査で決定された計画は以下の通りです。

1. 取水堰水門の拡張と堰の改修（土砂吐きの設置）
2. 洪水路（ワジ＝涸れ川）通過部の改修（E区 3 km地点、D区 1.6 km地点）
3. F G区岩盤周りの用水路土手かさ上げ、D区末端水道橋かさ上げ
4. 取水口からブディアライまで 10 km区間の再ライニング
5. 同区間の柳枝工の手入れ（補植と伐採）、崩れかけた土手の補修
6. PMS の認めない揚水水車の全面撤去
7. 主幹水路からの過剰分水の制限と順番性の確立

以上を、予算と相談しながら、3 年がかりで計画的に実現する積りでおります。昨年 11 月からはその第一弾で 1.5 kmまでの再ライニングを実施、非常に良い結果を得ております。

また、普及計画に伴う動きの中で、ややもすれば「作りさえすれば何とかなる」という安易な傾向も生まれやすく、次の研修の中で、維持補修の現場も組み入れたいと思っています。こうして長い間には、請負会社も行政も、質が上がってくるものと期待しております。

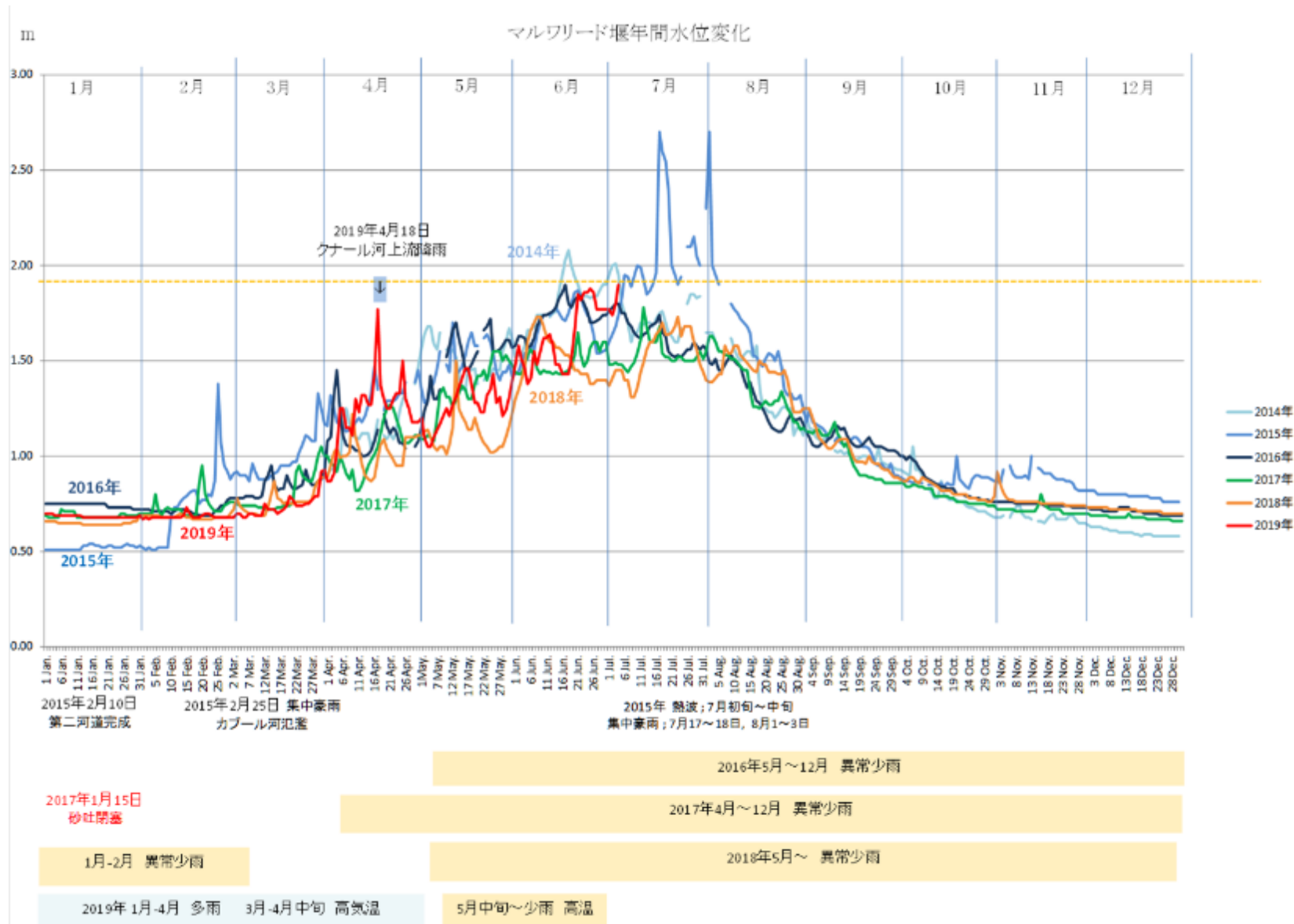
同区域はカシコート堰建設（2015 年）以来、殆どともに立ち入れなかつ

た所です。今回、スランプールのその後などを見て、更に溢れる緑と農地の目覚ましい拡大にずいぶんと励まされました。水田の爆発的な拡大は喜ぶべきですが、一部では送水待ちの区域も出ています。用水路の機能も強化しながら、地区同士の協力を粘り強く訴えていく積りでおります。

なお、ガンベリ排水路シギ分岐は、工事先端 1.2 kmを越え、年内に予定通り終了する見通しとなりました。カチャラ堰流域も予定通りです。現在 7 km付近の護岸工事と、排水路 2 の工事が進められています。何れも木陰のない焦熱地獄の現場で、派手な話はありませんが、黙々と着実な働きが行われています。

2019 年 7 月 4 日 記

クナール河の水位は、例年なら現在がピークだ。水位は気温、上流域の降雨量を反映する。昨年（2019年）の場合は、その年の冬の降雪量が少なく、高気温になっても解ける雪がなくなっていたと考えられる。2010年、2015年の出水は、何れもモンスーンが厚く広範囲な雨雲を伴い、連日ヒンズークシ南麓に梅雨のような降雨をもたらした時だった。



マルワリード用水路G区（4.3～4.7 km区間）。建設後 12 年を経過、集中豪雨被害を免れている。17mの盛土斜面は、クワ、シーシャム、オリーブ、ビエラなどが植えられ、安定した樹林が形成されている。しかし、水路の余裕高が少なく、送水量を増すためには水路壁のかさ上げが必要になっている。

2019 年 7 月 2 日



G岩盤（4.3～4.7 km）からスランプール遠望。いつも出て来る写真ですが、これが最新です。下記の写真とほぼ同じ位置です。2019年7月3日



撮影は 2003 年 6 月 2 日、マルワリード用水路のルート確認中に撮影したもの。確か、同じく盛夏の暑い時でした。



以下、スランプール下流域。パノラマのつもりで、動画が撮っております。2019年7月3日



F 区間（3.7～4.3 km）の盛土上水路。2019 年 7 月 3 日



カンレイ

マルワリード用水路

G岩盤

G岩盤沿いの盛土上水路。安定してはいるが、余裕高が小さい。大量送水で溢水の危険性がある。2019年7月3日

